



恋謎

恋謎

「ふふふ、流石は八意印の薬。あの文さんをイチコロで眠らせるなんて恐ろしいものを作っていますね。これだけあればしばらくは大丈夫でしょうし、リスクをおかしただけがあります」

ガクツとうなだれ、意識を失った射命丸文を背負いあやしい影が現場を後にする。

カシャ

「ピクツ！ なんだ、カメラのボタンに当たってしまっただけだった。とりあえずフィルムもたつぶりありますし、じつくりと楽しませてもらいますよ」

ニヤツ黒い影が人の目がないか確かめ進んでいく。

「博麗の巫女ー。いないの!？」

ツインテールがチャームポイントの天狗こと、私姫海棠はたてが、めったに訪れることのない博麗神社に飛び込む。

「あー五月蠅いわよ。午後のひと時。運が良ければ今日こそ文が来る。悪けりや魔理沙がタダ飯を食いに来る。そんな一日にあんたが来るなんてどうしたのよ」

「2日前ほどから文が戻らないのよ。ここに泊まり込んでキヤッキヤウフフなことしているんじゃないかと思っただけれど、そんな気配がないし探しにそこらを回ってみたけど見つからないのよ」

「確かに新聞は速度が大事って言う文が2日も取材に出るのは、異変があったかドキュメンタリードラマでも作るかぐらいよね。あとは面白い被写体が泊まり込みでどこかで歩いてる時か。あんた心当たりはどれぐらいの場所を調べたの？」

「友人はあまりいないけど……天狗の里と人里近辺なら

調べたわ。にとりさんところや香霖堂。そして柊さんところも行ってみたけど駄目だったわ」

「ここを除いたらだいたい文がプライベートでいそうな場所よね」

外出をあまりしないヒキコモリ体質の私ではあるが、霊夢自身が調べるとしてもどの道、霊夢も最終的に言った3か所にある程度絞っていただろう。

「何か面白い事件を追いかけているか、異変を起こそうとしていた人物を撮影してしまい口封じをさせられたか。幻想郷の外に何かしらの要因で弾きだされたかになるでしょうけど、結界が正常に作動しているし紫が戯れを起こしてない限りは幻想郷のどこかでしょうね。もし外に飛ばされたとしたら八雲の連中が黙っていないわ」

「あんた、確か他人が撮影した写真を念写できるとかそんな感じの能力もってたわよね。文の写しそうな写真か、偶然でもいいから文がどこか映ってる写真は無いの？」

念写する程度の能力。とはいえ、他人の撮影した写真を

映し出す能力なので新聞として新鮮味はでない。が、今回のように写真を持った天狗が行方不明ということは、何か撮影している可能性がある。

「検索作業をやりながら調べてたけど……って、新しい写真がで……なんじゃこりゃー！」

端末のモニターに現れた写真を見た私に電流走る。同時に鼻血も飛び出しそうになる。

「なに？ 腹でも撃ち抜かれた？ はたてと思つたらレモンだったのね」

「そんなネタ、今の20歳前後は分かりませんよ！ そんなことより、これ見てくださいよ」

カメラに映し出された文の姿は、スクール水着（白）を着せられていた。

「あとで現像しておいて。あと、誰が撮影したか分かる？」
「当然です。あ、撮影した人とかは分からないですね」

少しばかり互いの煩惱が先走り大事なことが2番手に回されてしまっているけど私と霊夢なら仕方ないこと。文

が大好きなら当然の思考回路よね！

「見たところ、木造の家であることには違いないようだわ。俯いているのは顔が映らないように抵抗しているのか意識がないのか理由は分からないけど……あ、次の写真がで……」

微妙に全年齢禁止のB地区が見えるぐらいに透けた白スク水の文が現れる。

「なんて羨ましいことを！ はたて、私と今回の異変は手を組みなさい！ 今すぐここに参加……じゃなくて文を助けにいくわよ」

「当然じゃない。私達も文を着せかえした……じゃなくて魔の手から救わないといけないわ。あ、これは地底の異変の時に文がしていたことね。うふふ、お揃い」

これが相棒が文と一緒に異変に挑むなら最高にハイつて奴だけれど、お揃いのことができただけでもよしとしよう。

何より同じように文が好きだという霊夢のことを、これ

を機会に知るのもいい。

「他には写真がないのかしら？ 誰が取ったとか他の角度とか」

「そこまで便利な能力じゃないわよお。この人が撮影した写真とかそういう調べ方もできない。結構不便なところもあるわ」

ある程度、文を連れ去ってメリットのありそうな人物と嫌がらせたような人物を探すのがベターな方法ね。とはいえ、あまりそういうことに詳しくないので霊夢に頼るしかないわね。

「こんな嬉し恥ずかしなイベントして喜ぶって言うと、紫とか永琳とかそういう変な連中が代表ね。こんなときは紫をとりあえず犯人にしてボコって話を聞いてやる。違っかったら他を探せばいいのよ」

拳を握り背中に炎が巻きあがってそうなほどに、普段ぐーたらな巫女がやる気をだしている。

「文から聞いたけど過激だわあ」

今までの巫女もいろいろいたが、今回のこの巫女も十分な奴の代表に入れられるほどに過激。

この巫女が現役の間は自分から危ない異変を起こすのだけはやめておこう。昔の巫女も強かったが、この巫女は何をしでかすか分からない。

姫海棠はたては、ナンバーワンよりもナンバーツー。ナンバーツーよりも外野からニヤニヤするのが向いているのさ。

「そうかしら？ いつの代かは忘れたけど、拳一つで妖怪を黙らせたとか言う話を聞いたことあるわよ。さすがに殴りつけて風見幽香を黙らせるとか人間やめてます状態じゃないかしら」

「ナニソレコワイ。っていうか本当にそれ人間なの……」
あのDSで有名な妖怪が手加減するとか考えられないし、弾幕ごっこのルールがない時代は特に妖怪は自重せず人間を襲ってたはずよね。なに博麗ってスタンド使いやそんなものじゃないもつと恐ろしいものなの？

黒幕が死になつたらとりあえず助けてあげようかなと、愛しの文が誘拐されながらも同情する余地が生まれた。

「まあこれは保存しとくとして、他に有益な写真は無いの？ このままじゃ犯人のやりたい放題にされる文を見て喜ぶだけで終わるわ。パーティには参加しないと」

「そうね。とりあえずこの写真を見るに誰かの家なのは確実でしょうね。綺麗な布団とか生活道具があるということはある程度の生活も保障はされてるでしょう」

「じゃあ怪しそうな奴の家行ってちよつとポコリに行くわよ。この作品のルールの的に2人で行かないと駄目なのよ」

「なんのルールなのよお！」

絶叫する私をお構いなしで首根っこ掴んで飛び立つ。昔の巫女が異変解決したときは、妖怪がパートナーなんてこともないし何より天狗を便利なアイテムではなく妖怪として見てくれてた気がするわ……。

最近ようやく弾幕の撮影を始めたばかりの私をひっぱって霊夢は竹林の中を高速移動でかつ飛ばす。気をつけないと竹にぶつかりそうなストレスな場所を飛ぶスピードではない。

「あのお。どうみても永遠亭だと思うのよ」

高級な日本家屋が密林の中から顔を現す。一度はこういつた建物の料亭でご飯をたべてみたいものよね。

「畳があつて異変起こしそうで身近にいるのがこいつらだからとりあえずボコる。違うかつたら別の場所に行けばいいじゃない？」

え、幻想郷ってそんなので事件解決されるんですか？ たしかこの流れって探偵霊夢と助手の私が推理して平穩無事に頑張る話ですよ？ 暴力沙汰なんて想像してませんけど！

思った方向性とまるで違う流れに困惑するも、すでに目の前の兎達に相方(?)が殴りかかっている時点で共犯者扱いである。

「ああもうどうとでもなれえ。……文ほどじゃないけれど烏天狗は伊達じゃないのよ」

精密な射撃なら文にも負けない自信がある。

弾幕として美しくそして華やかかつ実用的な自機狙い。

うーん完璧ね。

「曲芸【板〇サーカス】」

外の世界のアニメを見てまんまばくつた素敵弾幕。

自機狙いを混ぜこんだ基本に近いものだとは思っている。

「派手に飛び交う攻撃もできるじゃない。あの攻撃は自機狙いをまとめてからチョン避けが有効ね」

いきなり攻略方法を口で説明しないでよ！

「似たような攻撃ならできますよ」

屋敷から飛び出してきた優曇華が対抗してはたてに座や……弾幕を放つ。

「弾幕ゴツコは苦手なのよ。えーと、カメラカメラ」

文と同じように弾幕を撮影してかき消す効果を持って

いる私の携帯カメラ。それに付けられたストラップは自作の文の縫いぐるみなのは誰も気が付いていない。

「ちんたらしてたら日が暮れるわよ。こういうのはね……フルスイング【ホームラン宣言】」

お祓い棒を全力で振りかぶり優曇華の顔に叩きつける。どうみてもただの物理攻撃でスベルカード宣言の意味すらない攻撃です。

「いたた……まだおわつ……」

クリーンヒットして遠くに飛ばされた。優曇華が少しゴロゴロと転がりながら顔を抑えてる。

そんな状態でもなんとか立ちあがろうとする優曇華の腹部を全力で蹴るモーションを見せる。

「諦めないならこのまま気絶するまで蹴りつけてもいいのよ？ さて優しい私はここで選択肢を与えてあげた。3秒以内に応えない場合はこのまま蹴るわよ？」

もはや外道としか言いようがない。正直妖怪よりも巫女のほうが道徳を学ぶべきだ。

「終わってます終わってますからああ！」

不良の喧嘩のような勝ち方で霊夢はそのまま屋敷にズカズカと乗り込む。

中から爆発音がしたりするけれど私は知らない。見てない聞いてないかかわってはいる。

スベルカード宣言すら認められず負けを認めさせられた優曇華が半泣きで私にすがりつく。

「相方だったらあのフリーダム巫女を止めてくださいよ
おお」

言うことはもったもんだけど、下手なことしたらホームラン宣言を受けるのは私である。あの美味しい現場にたどり着くまでは私は死ぬわけにはいかない。

むしろ付いていくしか道がない悲しきこの身にできることは、お楽しみタイムにたどり着く日があることを期待する以外ない。

「今の私に彼女を止めることはできない。あの人は……遠いところまで行ってしまったのよ」

遠い目をしていろんな意味で遠い存在だと言うしかなかった。

「いやあ勘違いだったわー。そこらへんで暴れてたら永琳が土下座して勘弁してくださいまで言われちゃった☆」

妖怪神社だから人がこないんじゃないかって、こんな人だから一般人は今では守矢を普通のまだ常識的な神社として見てるんじゃないだろうか。

まあ最近では常識にとらわれないように変な努力をして方向性を見失ってる気がするけど。

ともかく巫女という生物はこれほどまで危険な生き物だとしたらいろいろと認識を当たらめる必要性があるわね。

あれほど外道なこととして、台詞に☆を入れる主人公なんて他に見たことないわ！ と、思ったけど魔理沙さんもつ

けそうですね。

「代わりに家宅操作させてもらったけれどね。輝夜がなんかピコピコしてたぐらいだったわ。うっかり蹴り飛ばしてセーブデータ消えてしまったけど。人を殺しそうな眼をするから睨み直したらそのまま悔し泣きをするなんて姫失格よね」

ピコピコって外の世界のおばちゃんですら、もう使わないうって……使わないから幻想入りしたんですよ。あ、もう後半の言葉には反応しないわよ。異変解決中の巫女には関わるなって聞いたことがあったけど、まさにこのことだったのね。

「まったく、月の頭脳も守矢神社も独自の力で電化製品を動かすなんてせこいわ。こんどうちにも電力を持ってくるように言わないと駄目ね」

守矢信仰したら霊夢さんなら安定した生活を神奈子さんに約束してもらえる気はしますがね。でも、こんな危険人物を守矢の巫女にすると信仰が減りそうなので神奈子

さんやめたほうがいいわ。

「とりあえず……優曇華みたいな犠牲者を増やさないためにも推理していきませんか。写真を調べればそれだけ情報が増えるので、ある程度絞り込んだ襲撃ができると思うのですよ」

証拠があつてそれで諦めてくれる相手ならいいけど、この幻想郷を見るからに乱闘になるのだろうかなあ。

「待つのが面倒ねえ。そうだ、あんたは調べる。私はそこらじゅうに殴りこむ。両方できるから2人組の楽なところよね。あ、ついでに先に答えがたほう文を助ける王子役ね」

「殴りこみかけて無関係な人を吹き飛ばす王子がどこにいますか。それよりも博麗の巫女が無駄に幻想郷を荒らしていいの？」

「いつものことよ。異変解決に犠牲はつきものってね」

……たしかに本命にたどり着くまでに何人か無駄に犠牲になる人は毎回いた気がする。

いやいや納得させられちゃだめでしょ。この巫女による被害者を減らすためにも急いで核心掴める写真を用意しないと。お祓い棒と鈍器の差を理解してないコレを放し飼いにするわけにいかない。

「次に我々がやってきたのは紅魔館」

いつ見ても眼に悪そうな色。少なくとも私はこんな色した家には住みたくない。畳がないと落ち着かないのは性というもの。

「ここって和式ないわよ」

「とりあえず怪しいところは殴りこむでしょ？ 煙がなければおこせばいいって言うじゃない」

その発想はおかしい。

今にもステイブ・セガールになりそうな巫女をなだめて無駄な犠牲者を出さないように努めたいけれども、この人たちを助けるのはこの巫女のやる気から見て無理そうだ。

紅魔館を見捨てて守矢神社などの身の潔白を晴らすのがベターと言うところかしら。

霊夢を止めるのを諦めて私は他の勢力の情報を収集することに努める。

文のことだから有名どころの集まりは写真を収めてい

るはず。そして事件に巻き込まれたならそのカメラに何か捉えてるに違いない。文が私に託したチャンスを必ず掴んで幻想郷の平和を霊夢の手から守って見せる！

「あ、霊夢さ、ぎゃあああああああああ」

材質が木だというのは間違いなく嘘だと言う音を立てて美鈴のこめかみを叩きつける。それ間違いなく妖怪でも数日死んだ気分になれるほどダメージありそうなんだけど。

あ、さすが門番まだ立とうとした。でも、外道巫女は伊達じゃない。蹴りつけて沈黙させたわ。

ごめん。私ではここを助けられなかった。だって挨拶しようとした門番を問答無用で殴り倒すのよ。

目の前でいともたやすく行われるえげつない行為から私は眼をそらす。けど写真だけは取っておこう。記事になればラッキーよね！

「さて話がついたし入っていいわよ。あとはメイドがいるけど同じようにやれば歓迎してくれるわ」

神よ治安は幻想入りしてないのですか。：ああ巫女は神に仕えてましたね。世も末じゃないの。神も仏も外道ばかりだわ。

「もうちょっとけが人を減らす探し方ってできないの？ てか、レミリアさんとかと友人よね？」

「あ？　これが私の推理よ。怪しいやつは友達でも取り合えずぼこる。そして話を聞いてやる。一応こんなこととしてても皆うちにきて宴会するから物好きが多いわね」

文の取り合いするとしたらコレと戦うの？　引きこもり生活長かったからすぐ死ぬるわよ。しかもこんなことしてて好かれてる霊夢と魔理沙って何なの？　幻想郷ってDMの集まりなのかしら。それとも普段の霊夢達は魅力的なのか気になるわね。

そんな魅力ある霊夢から矛先をかえた紅魔館の人が、天狗のほうに報復きませんようにと願うばかりだ。

「さてと、とりあえずレミリアのところに行くわよ。咲夜ならレミリアのところ行く前には現れるわ」

ここまで相手のこと理解して、普段から宴会してる相手をよくもまあここまでボコれるものだ。

引きこもったままのほうが安全だったかもしれないなあ。

少しばかり勇気を出して新しい行動を起こしたことを後悔する、

「好き放題暴れてるわね。異変のたびにこうなのかしら？」

「あゝ。たまに2人で暴れることもあるかな。永遠亭の時は紫と2人でちよつとやんちゃしちゃった」

幻想郷の賢者と2人でこいつは何をしてるんだ。

頭を抱え頼む相手を間違えたと後悔するも、時すでに時問切れ。

「大丈夫よ。私に解決できない事件は何もない。このお祓い棒で何人もの黒幕を倒してきた」

無関係な者も倒されてきた。

ああこんなことなら魔理沙に頼んだ……ら、建物ごと吹

き飛ばしかねない。この世界で探偵の物まねをするにはあまりにも暴力的すぎる。

「んー。パチュリーが異変を起こすとは思えないし、とりあえずレミリアをぶつ飛ばすのが一番ね。そろそろ怖いメイドさんが来るから気をつけなさい」

「誰が怖いメイドさんよ。…まったく、紅魔異変から先は大人しくしてる平和的な場所に殴りこみとは、幻想郷の巫女つてのはヤクザよりも危ない商売なのかしら？」

時間停止で有名な咲夜さんかあ。文がいろいろと教えてくれたけど、この人のトリッキーな動きは火力の低いところを軽くフォローしてもお釣りがくると言ってた。

「正義の味方とは言わないけど、幻想郷の悪を討つ巫女よ」

今この姿を見た人は絶対私達が悪だと言うだろう。誰だつてそう言う。私だつてそう言う。

「覚えのない悪事は働いてませんわよ。罪状を教えてください。たら思い出すかもしれませんか？」

「射命丸文の誘拐よ」

ああたぶんここも無関係なんだろうなあ。でも霊夢さんを止めて矛先が向くのはいやだなあ。

あ、そうだ今の間に推理できそうな写真でも集めておこうと。王子様役も手に入れられるし丁度いいわね。

「記憶はないんですが……。そういったことなら戦うしかありませんね」

ナイフを構えた咲夜相手に霊夢は攻めの一手を選ぶ。突き出したお祓い棒が頬をかすめる。

最近の人間は怖くなったものだわ。

「材質が鉄じゃない。人間なら死ぬわ」

鉄のお祓い棒がこの世界にあつてたまるか。この巫女は常識に囚われてもいいと思うわ。

「ナイフ投げるメイドには言われたくないわね。大丈夫よ幻想郷の人間はこれくらいじゃ死なない」

いや、どう見ても壁を砕いています。

咲夜さんの回避した先に突き刺さるお祓い棒が紅魔館

の立派な壁を破壊している。流石にこれはそろそろ止めるべきね！

「えーと。永遠亭の時にみたいに全部の部屋を見せてもらったら平和解決できると思うんですがあ」

よしこれは最高のタイミングよ。竜宮の使いに負けたくないはず。

「…空気読めよ」

咲夜さんが怖いです。

あ、霊夢さんも睨みつけてくる。

凄く最低のタイミングでしたね。

「があ…。そうはさせないとはさすが黒幕よね。このカメラが真実を映すためにも霊夢さん頑張ってください」

喧嘩売られた相手も乗り気だったらしかたないわよね。

それとも私がひきこもってる間に世間の感覚が変わって、今ではこれが正常な弾幕ルールなのかしら？ だとしたら博麗の巫女は実に素晴らしい巫女！ と、言うことにして私は怖いので大人しく携帯をいじっておきますね。

「任せなさい。あんたは私がかつこよく文を助け出す姿を撮影する仕事があるからね」

「そんな仕事はここではない」

咲夜と霊夢の間に割って入り二人の弾幕を軽々と受け止めるはこの館の主レミリアさん。

「まったく。咲夜も遊びたい気持ちは分かるけど室内はやめなさい。霊夢もお願いだから紅魔館の中では暴れるのはやめてくれないかしら」

一瞬にして戦いを停止させられるとは流石、これからふつとばされ…もといこの館の主にしてカリスマの象徴レミリア・スカーレット。

その威圧感はまさに夜の王の名に相応しい。と、しとけば怒られないかな。

「あ？ 私の文を連れ去って何ほざいてるわけ？ 何、紅魔異変よりも激しい夜でもやる？ 今やっちゃう？ 今夜はバーサーカーソウルが止まらないわよー」

霊夢の一睨みでレミリアはすでに涙目。さらに間合いを

詰めてレミリアを見降ろしさらに言いよる。

「だいたいレミリアなら私のやり方をしってるでしょ。ほら弾幕しちゃう？ しちゃうよね？」

「うー。霊夢が怖いよおー」

「もうやめてー！ レミリアさんのライフはもうとつくにゼロよ！」

言葉攻めで小さい娘を泣かせてる大人げない大人を私は止めるべく飛びかかる。

「H A ☆ N A ☆ S E !」

なんなのよこの茶番劇。

こんな内容をどうやってかつこいい記事にしろって言うのだろうか。

「うー。だってえ、霊夢や魔理沙が暴れるせいで修理が追いつかないんだもん！ フランまで暴れたら流石に私だって泣くよ」

カリスマの代名詞……ですよね？あれだとただの可愛い幼女じゃないの。

鼻血を垂れ流しにしてるメイドの姿の気持ちからなくもないけれど、こんなのでいいのか紅魔館。

「そんなわけで調べさせてもらうわよ」

「はぁ好きにしていっていいから暴れないで。それにたまには私も弾幕じゃなくてダンスとかを楽しんで欲しいわ」

「夜の王からのお誘いとは私も悪い女よね。でも駄目よ。私は文を先に誘いたいもの」

運命を操ることができたなら目の前の少女を手に入れるだろう。

でも、彼女はそうはしない。

「つれないわねえ。それじゃ私はまた寝るから好きになささい。あとそこの天狗。突っ込み力が足りてないから精進なさい」

「あまり成長したくないスキルだわ」

しかしレミリアさんの言うとおり突っ込みを入れなければ、この巫女についていくなんて夢のまた夢だろう。椀のように文につっこみを入れられるぐらいにはなっ



たほうが、相方に相応しくなるかもしれないかな。

って、私はあにを考えてるのよ。

「はたてえ。なに一人でブツブツつぶやいてるのよ。たぶんここにはいないから次行くわよ」

「そう思うなら初めから襲撃しに来なくてよかったんじゃない？」

これぐらいの突っ込みから初めてみよう。

「そうよねえ。冷静に考えたら紅魔館に和式は普通ないわよねー！」

「行動する前に先に考えて欲しいわ」

垢抜けた爽やかな笑顔をする霊夢に、精神的に疲れ切ったはたてがレミリアの助言通り突っ込みを頑張る。

私が頑張らなければたぶん誰も彼女を止められない。

「幽々子のところか紫のところと早苗のところぐらいかしら。こんなこととして楽しむのは紫のほうが可能性ありそうね」

これで違ったら5人目の犠牲者となる。

「とりあえず守矢神社のほうは白っぽいと思うわよ」

「へえ。何かしらアリバイでもあるのかしら？ 共犯で隠してたなら泣かすわよ」

「ありえないわ。文が撮影した最後のほうの写真で、守矢神社のほうでは何かイベントをしているみたいよ」

様子を捉えた写真を見るなり霊夢は確かに無関係ねとあっさり引き下がる。

ここまで暴走してただけに、この折れかたが不気味に感じられるわ。

「これは神降ろしの儀式ね。目の前に神が2柱もいるのに一応形式上やつてるみたいね。私も分社を立てたときにやり方は教えてもらってるわ。もつとも神奈子達を降ろすメリットが私にはないけれど」

やったあ！ これで無関係な人が無事救われたわ。

「じゃあこのまま幽々子のところ殴りこみでいいわけね」
「いいわけあるかあ！ 今みたいな感じで頭使つてもいいよね！？」

「頭使って早期解決ができた試しがないわ。とりあえず妖夢をぼこって紫を殴れば進展するわよ」

何この無茶苦茶な論理。ジャイアリズムなんて初月モードレベルじゃない。

「誰かー！ この暴徒を止めて！ この巫女の残機はあと5つよー！」

「コンテニューを入れたら倍率ドン。さらに倍プッシュだ」

レミリアさん。突っ込みは幻想郷では過酷な道らしいです。

止めること適わず霊夢のあとを着いていく。

「そんなわけで訪れましたは白玉楼。庭師がこちらを睨みつけてますねー。いやあ凄い歓迎の眼差しで嬉しい限りです」

「歓迎されてる顔じゃないわよ。今すぐにでも斬りかかってきそうで正直ここじゃない臭いがぶんぶんするわ」

何枚か見つけた写真から見るに文がいるところは日当たりの悪いところな気がするけど、ここは亡霊の家なのに日当たり良好風通しよしの南向き物件。付近に高い建物はありません。さらには高級感あふれる日本庭園をお楽しみくださいと至れりつくせりだ。間違いなくここじゃないと常識的にそう思う。

「斬りこんで来るということは見られてはいけないものがあると言うことなのだよワトソン君」

「誰がワトソンよ。て言うか、推理するならもつと頭つかいなさいよね。これじゃ力任せの恐怖政治じゃないの」

何より不法侵入して暴れてたら誰だっつて対応するわ。

「大丈夫よ」

自信満々に大丈夫と言うけれど何を安心しているのか今回もさっぱり分からない。

「博麗の巫女に逆らえば幻想郷から蹴りだすだけだから」

「おいしいいいい。巫女が本当にそれでいいの!？」

楽園の巫女はいつから真っ黒なラスボスになった。仲間になれば世界の半分くれたりするのかしら。

「冗談よ。流石に紫に本気で怒られるからしないしない。

まあこれぐらいは今の幻想郷じゃ日常茶飯事だから、怖いならヒキコモリを継続することをお勧めするわ」

「巫女の忠告は有り難く受け取るものね。だが、断る」

「人の家で何を漫才してるんですか。お笑いを招いた覚えはありませんよ」

庭師が睨んだ眼から呆れた眼に変わってこちらを見つめている。

アレ私達可哀そうな子に思われてる？

「お笑いじゃないわよ。ちよつとした異変解決屋さんよ。そんなわけで文を返せ」

「言っている意味が分からない！」

「そうだろうなあ。私もなんでここに来たのかももう意味が分からない。あんた達なんでかわかる？」

「話し合いもできそうにもありませんし、迷いすらない真っ直ぐな暴走を斬り伏せてみせましょう。その天狗もここより先に進むというならば斬る！」

「できれば私は話し合いがいいのよおおお！」

剣を振りまわすお庭番から逃げ回る。

進むつもりなのは一人だから巻き込まないで欲しいわ。

「はたてーそいつのことお願いねー」

射程の短さゆえはたてに集中すれば霊夢を止められない。勝手に乗り込んで面倒そうなのを私に押しつけるわけえ！？

「あ、こら巫女！」

とりあえず眼先の目標を私に定めたバーサーカーな妖夢からは全力で逃げる。

「霊夢は諦めて、天狗だけでも仕留めてみせる！」

「みぎゃー！ 外はやっぱり怖いよー！ もうおうちかえゆ！」

こいつ御庭じゃない鬼だよおお。

じゃあ刀があたるあたる！

「お連れの天狗ちゃんが泣いてるけどいいの？」

「あー。あとでフォローしとくわ。文に怒られたくはないし」

涙流しながら妖夢から逃げる私の姿に、霊夢も流石に罪悪感を感じてる。といいなあ。

「妖夢。今からこの2人はお客さんだからそれぐらいにしてあげなさいー」

主の一声で振り上げていた刀を鞘に納める。

「分かりました」

死の恐怖から解放された私は霊夢に抱きついて妖夢を指さして涙目でうったえる。

「大丈夫もう暴れないから安心していいわよ。ほら、妖夢もどうどう」

「猛獣じゃないですよ。…天狗さんも泣きやんでください。私ぐらいで泣いていたら文さんみたいな写真は撮れませんよ。いいカメラをお持ちなんですから、頑張ってください」

「ううう。文ってどんな死線を毎日くぐり抜けてるのよお。戦場カメラマンにでもやれってのー」

流れ弾と違ってこちらのほうは、自分に向けて弾丸が飛んでくるので死亡フラグがバブル成長期。

「その表現は間違えては無いわねえ。…あー本当にごめん。そろそろ真面目に推理を始めるわ。妖夢お茶出して」「はいはい。泣かしてしまつたお詫びに天狗さんにはお茶菓子も出しますよ」

「私のは9こでいいわよ」
「勝手に押し込んでくる人は、雑草でも食べていてください」

私もお客様だぞーと騒ぐ霊夢を無視して妖夢は台所へと去っていく。

「やれやれ。昔に比べて堅さが減っていいことだけど弄りがいが無いわねえ。さて、はたて仕事よ」

「ばっこーい！」

立ち直りが早いのはお菓子のせいか出番のせいか？何にしても私が元気になった姿を見て霊夢はほっとしている。どうやら普段の霊夢はこういう感じなのかもしれないわね。

「守矢もここも違うなら本気でマヨヒガぐらいしかないわよ？」

「確かに文を実力行使で連れていくなら幻想郷の賢者やここの亡霊のような強大な力があるわ。でも文は幻想郷最速を名乗れる速さがあるのよ。そう簡単に別勢力から捕まるなんてことはないはずよ。まあスキマ妖怪なら速度関係無しで捕まえられるでしょうけど」

本人は報道好きのか弱い天狗だのなんだの言うが、間違いなく実戦配備されている他の天狗をはるかに超える戦闘力を持ち合わせている。正面から挑んだとしたらスキマ

を使えど激しい戦いを繰り広げるはずなので、何かしらも戦った跡があつてもおかしくない。

大天狗様や八雲紫のような規格外が奇襲したとすれば絞られてくるが、それでも文の足があれば追いつける者は簡単には見つからない。無茶な改造した魔理沙の箒なら直線だけなら追いつけるかもしれないが、捕まえられるかと言えば間違いなくその前に事故つてチーンつて音を鳴らすに違いない。

「そう毒を盛られたり、親しい人物に急に襲われた場合を除いてね」

同じように文に懐いているのにこの場に姿を見せていない者がいる。

3日も戻らなければヒキコモリの私ですら心配で家から出るのに、外を見回るのが仕事の彼女が、気がついていないはずがない。

私の能力では完璧に求める写真を見つuckerのに時間がかかる。それでも必ず存在する写真なら私の手の打ちに

手に入る。

「そう言えばこの状態なのに姿を現わせないのがいたわね」

私や霊夢よりもある意味で一番近い場所にいる天狗。

「この写真はおそらく守矢神社の後に撮影したものと思わ。きつちりカメラを構えてないせいでブレてるけど、犯人の姿がぼやけながらも分かるでしょ」

白色の狼なのに容疑で真つ黒これいかに。

「決まりね。あ、妖夢、塩ようかんおかわりー」

「ないからさっさと天狗を助けに行ってください」

空いた皿をひらひらさせて催促する巫女の尻を蹴り飛ばし妖夢はふすまをピシッと閉める。

「もうー妖夢のケチー。次の宴会の片づけは全部妖夢にやらせるわよー！」

ガラッ

「咲夜さんに優曇華さんが手伝ってくれます。そんなこと下らない会話よりも愛しの姫君を助ける王子の役目があるのですから、さっさと行ってはどうですか？」

「分かったわよ。邪魔したわね」

「そう思うなら勢いだけで殴りこむのはもうやめてくださいね。幽々子様もしくはは異変をわざわざ起こすつもりはないのですから」

たしかにあの亡霊は妖々夢異変の時は自分の想いの為だったが、それ以外で幻想郷を大きく巻き込む事件を起こしそうには見えない。

ただ庭師をからかって遊ぶのが凄く楽しそうには見えるから、それだけで幸せな生活を送っているのだろう。

妖夢さんに挨拶をし私達は妖怪の山へと向かう。

「本来は立ち入り禁止なんですがね。私が同伴ということと、ちよつとした異変の調査ということで大天狗様には許可を取ってます。つて話聞かないで何山菜とりしてるかあ！」

懐から取り出したハリセンで頭を叩きつける。

妖怪の山入口付近にパーンッ！と気持ちのいい音が響き渡り鳥達がバサバサと飛び立つ。

「何すんのよ！ 人が山の幸を取るのに必死だったのに」
「今度また大天狗様にお願ひして入れてあげるわよ。だから文を助けることを第一目標にしてよ」

私の案に納得してくれたかして霊夢は重そうな腰を持ち上げる。

こんなことばかりしてるから貧乏巫女って不名誉な呼び名がついてるんでしょねえ。

「椛の家には神社に行く前に寄ってるけど、写真に写って居るような部屋はなかったはずだわ。妖怪の山の写真を検索しながら一応椛の家をもう一度確認しに行くわ」

「分かった。それよりも一応あんたでも一応鳥天狗なのね」

椛と同じ位の立場の者からはすれ違うたびに一礼される。

他にもとり以外の河童も同様に頭を下げている。

「まあね。とはいえ彼等は私が誰かも理解してないわ。ただこの姿で自分の目上だと思っていない。形ばかりで本気で敬意を示しているのは文に対する椛とかぐらいね。まあ今回の事件の原因は聞かないと分からないけど、たまに噛みついたりしてるけど椛は文を嫌いには思っていない」
「憧れてるからこそ理想とずれると噛みついてるのかもしれない。」

私も椛も憧れたから同じなのよね。

この博麗の巫女は文の何に魅かれたのか？ 興味はあるけれど答えは期待するだけ無駄そうね。

「私のことが興味あるのかしら？ それとも文のこと？」
「勘がいいというのは噂通りのようね。」

それに頼り過ぎとか言われてるらしいけど、外の世界には勘がいいパイロットがニュータイプとか言われてるらしい。霊夢もおそらくそれなのかもしれない。

「別に何でもないわ」

「ふうん」

私の返答に満足はしてないようだ。

「あによ。どういう答えなら喜ぶの？」

「素直な気持ち。なんてね。まあそういうのは置いといて
柊の家はまだなのー？ 飛んだほうが早いじゃない」

「飛んでる姿は歩く以上に目立つからね。あの子の能力は千里眼なのよ。外の軍事兵器のレーダーすら玩具に感じるほどらしいわよ」

どういう測定で玩具だと決めたかは知らないけど河童がそう言ってた。たぶん外の世界のほうが優秀だと私は思うけどそういうことにおけば、霊夢も諦めて歩いてくれるから嘘も方便みたいなものね。

「臭いとかでは見つからないの？」

「たしかに鼻もいいほうだけど本物の犬と白狼天狗は違うわ。私は文みたいに最速にはなれないし、柊みたに遠くを見ることもできない。人間でも得意不得意があるのと同じよ」

「レミリアとフランも同じ吸血鬼とは思えないしねえ」

「とか言ってたらついたわ」

霊夢は今までと違い慎重に扉に近づく。

「護符で何かしらのセンサーを付けてるわね。それに縄も見えるところから普通にベーシックな仕掛けもあるよね」

お前巫女じゃなくて忍者だろ。

「んー。家とは違うところに隠れてそうね。文の写真を直しても薄暗いところよね。この家は日当たりがいいし斜光カーテンもしてない」

こういうことをしたかったのよ！

ようやく推理物らしい流れになってきたわあ。テンション上がってキターー！

「さて他の写真を見ても普通の家ほいけど家具がないわね。つまり猟師が使う小屋かそういう場所になるわ。心当たりがあるかしら？」

「んー。守矢神社のほうに小屋があったわね。普段は誰も使わないし人もいないから完全に頭から抜けてたや。てへ」

「てへ。じゃないでしょ。で、その小屋はこっちのほうかしら？」

霊夢の指さす方向はまさに小屋のあるほう。

「勘？ それとも何か確証が？」

「魔力の流れが向こうに伸びてたからね。パチュリーやアリスならこんなミスはしないでしょうけど、杖のは付け焼刃の仕掛けだったようね」

ああたしかに微妙に違和感を感じるわ。でも言われて意識しないと分からないくらいには隠せてる気がするんだけど、そこらへんは流石は腐つても巫女つてことね。

「さてと私もカメラの準備をしないといけないわね」

おい、その一眼レフをどこから取り出した。そもそもカメラの趣味なんて聞いてないわよ。

「あ？ そこそこ前に霖之助さんところから借りてきたのよ。もちろんネガがないとか言うバカなことはしてないわ」

そういうオチがありそうだもんねえ。しかし手袋まで取り出してやる気まんまんじゃない。

「そういうものを見せられては私も手加減できませんね。この携帯カメラはあくまで念写サポートの道具。本気を出せば外の世界から取り寄せた最新鋭のデジタルカメラを使うことぐらいどうつてことないわ。容量も気にしないでいいほどにあるからほぼ連射で文の姿を取れるのよ」

「やるじゃない。さて、犬走杖にお仕置きもだけどいざ夢の楽園へと行くべきよね！」

私達2人は親指を互いに付きあげ笑顔で走りだす。

これ以上は言葉を交わさなくてもやることは決まってる。

「ふふふ、3日も文さんといられるなんて、なあって素敵な時間なんでしょう」

「……はあ。まさか樫がここまでアグレッシブな子だとは思ってなかった。しかし私のこんな姿を撮影してどうするつもり？」

「アルバムに保存してニヤニヤします！」

樫の宣言に文は椅子から転げ落ちる。

脅しだのなんだのではなくニヤニヤするだけに捕まったのだ。

「そのニヤニヤに私達も混ぜてもらおうわよ」

「霊夢さんにはたて！ 助けに来てくれたんですね！」

文の体には力を抑えるお札が貼り付けられているわね。

どう見てもあれ守矢のやつよねえ。また守矢か！

「って混ぜてもらおうってどういうことですかー！？ ていうか、そのカメラは……」

「ふふふ。私達も文のことがだぁーい好きなの。この気持ち分かるよね？」

「だからあ。樫だけに美味しいところを渡す気はないわ」
私と霊夢はじりじりと文のほうへと忍び寄る。

「お二人……いや三人とも顔が変態さんですよ。あ、なんでも服まで脱ぎだしてるのですか？ あ、私の服を脱がさないでくださいいいいい」

泣きじゃくる文も可愛い。そう思いながら私達は樫に一発でこびんをいれて黒幕を形だけ倒しておくのだった。

何故それで終わるかって？

4人で楽しむほうが文を喜ばせれるじゃないですか。

「ああもう。こうなったら本気で相手してあげますから本気できなさい！」

開き直った文が自ら服を脱ぎ捨てて飛び込んでくる。

さあ東の国の眠らない夜はこれからね！



あとがき

今回は霊夢 はたてをメインにコメディしながら気持ち簡単な推理をする中身です。一言で説明するとだいたいそんな感じでしたね。

文ちゃん大好きを表現しながら頭悪い内容を書こうとしたら、枕が変態になって霊夢が暴走してしまう内容になっていますが、もちろん綺麗なお二人も大好きなので次の東方本は綺麗な霊夢を出そうと思います。

表紙は過去作の恋空でも描いていただいたしえっちさん。挿絵は恋力ではかっこいいイラストを描いてくださった墨乃みかさんの全面協力で今回も完成しました。お二人とも毎回ありがとうございます！

印刷所は今回もポプルスさんでいつものように頑張ってもらいました。

それでは皆さん次のイベントでまたお会いしましょう。

発行日 10月11日

文章書いた人 八神桜花

春の花吹雪 <http://www.4.ocn.ne.jp/~hubuki/>

表紙描いた人 しえっち

ぎんしば。 <http://ginsiba.web.fc2.com/>

挿絵描いた人 墨乃みか

朧密林団 <http://oboro.dousetsu.com/>

印刷してくれた会社 ポプルスさん

株ポプルス <http://www.inv.co.jp/~popls/>

